のんべえ地蔵

結城市

昔ある村に、酒屋と豆腐屋がありました。

ある夜、男が酒屋へお酒を買いにやってきました。その男は動きがゆっくりで、また童のような顔でした。どこかで会ったような気がしますがどうも思い出せません。

「酒を一升くれ」と男が差し出したのは、小さなざるでした。酒屋の主人は呆れて「なんだい、そりゃ、ざるじゃねえか。ざるに酒は入らねえよ。徳利をもってきな」と売るのを断りましたが、男は「いいから、これに入れてくれ」と言います。仕方なく、主人は徳利を貸すことにして、徳利の中へ酒をはかりました。男はその徳利を受け取ると、ざるに酒をあけてしまいました。

「酒が漏れちまうよ」と慌てる主人の予想に反して、ざるからは一滴も酒が漏れませんでした。あっけにとられる主人を残して、その男は闇の中に去っていきました。

丁度その頃、同じ顔をした男が豆腐屋に、豆腐を買いに来ました。どこかでみた顔だと思うものの、豆腐屋も思い出せません。

「これに入れてくれ」と差し出したのは徳利です。呆れた豆腐屋が「手妻遣い※じゃねえんだ。ざるじゃなきゃ入らん」と断りましたが、男は四角い豆腐をひょいと持ち上げると徳利に入れてしまい、たちまち暗闇の中へ消えていきました。

それから、その男は連日、酒と豆腐を買いに現れました。男は「ここの酒はうまい」「豆腐はここに限る」と世辞まで言うようになりました。不思議な男だと思っていたそれぞれの店の主人たちは、男の正体が気になり、ある夜後をつけて行きましたが、寺の前で見失ってしまいました。

夜では暗くてよく見えないので、ふたりは翌朝待ち合わせをすることにしました。

朝になり、辺りを探していると、かすかに酒のにおいがします。においのする方へ行ってみると、そこには口元に豆腐のかすをつけたお地蔵さんが立っていました。ふたりは「あの男はお地蔵さんだったのか。どうりで見たことがあるはずだ」と顔を見合わせました。お地蔵さんの顔はふたりにむけて微笑みかけているように見え、ふたりは一層驚きました。

※手妻遣い…手品師

〈参考文献〉茨城の民話 第一集 日向野徳久 編（未来社）

「運ぶ」を支え、地域社会を笑顔にする
ISUZU 茨城いすゞ自動車株式会社
本社／〒310-0063 水戸市五軒町1-2-5 ☎029-225-1215（大代） https://www.ibaraki-isuzu.co.jp